阿波三峰

親子の鐘の中津峰

朝念暮念

中津峰山如意輪寺
徳島市多家良町中津峰
TEL088-645-0008FAX645-0508
http://www.nakatumine.com
info@nakatumine.com

２０００年記念事業仁王門大修理
ご寄付ありがとうございました。
バス便、　３／１８　４/１５　９：３０アミコ前発
問い合わせい合わせ：徳島市バス観光課　088-６５２-２１３３

「中津峰の観音さまのご慈愛を受けて今日生きる」

吉田範三さん特集２

この原稿は北沖洲町の吉田範三さんにご執筆頂きました。自ら経験された五話の霊験記が綴られています。氏の人生観音様とともにあったといっても過言ではない希有な経験をされた方です。本誌では原稿にできる限り忠実に、先月より２ヶ月にわたって掲載させていただきます。

四、高圧線を握り焼死寸前

二回目に生命を頂いたのは幼稚園の頃である。夕方四時頃、父親の使いで近所に自転車の空気入れを返しに行く途中の出来事である。大通りの電柱より高圧線が切れて路上に垂れ下がっていた。金属製の空気入れを振り々々通りかかった。電気が通っているとは知らずピューンと電線を叩いた。時間は夕方四時頃、手にビリーとした感触と同時にと同時にピカピカと虹色の火花を見た。その頃線香花火しか知らないはずの私が大輪の花火を見て美しいと思った。そして、ついに電線を握ってしまった。右手でつかんだ瞬間ジューンという音とともに手が電線に吸い付き真っ赤な火を吹いた。次の瞬間電気が大地へ通り抜けようとして反動でポンと身体が飛び跳ねる。電線を握ってブランコのように飛ぶ。次に左に握りかえた。右手は燃えながら電線を離れた。三度握りかえた。両手が燃えている。そのときビシンという音とともに電線から手が離れ地上にころがった。私を見つけてくれた大人が物干し竿で電線をたたき助けてくださったのだった。高圧電のため、あと数秒で電気が大地に抜けていたという。右手左手と握りかえていたから助かったのだという。片手で握ったままだったらアースして真っ黒焦げになって焼死していたと事後医者が説明してくれた。幸い両手の大やけどだけで助かった。物干し竿で電線を叩いてくださった観音様。生命をありがとうございました。

五、米軍機の機関砲の直撃二ヶ所

三回目に生命を頂いたのは昭和二十年七月二十五日である。この年の四月に撫養中学校（旧制）に入学した。当時は軍国主義一色である。国防色という緑がかった色の服装に、帽子は「中」の校章に白線が一本はいった戦闘帽。足はゲートルを規則正しく巻いての登校である。勉強らしい授業もなく軍事教練と体育の時間が多かった。学校になれる頃、食糧事情が悪くなり、増産のため地域分団に分かれて農家の勤労奉仕に巡回していた。五月頃からは松茂の海軍航空隊へ飛行燃料の格納壕ほりに参加したり、岡崎海岸の陸軍暁部隊の上陸用舟艇の避難壕堀りと軍人と一緒に作業する地域学徒動員が続けられた。

この頃になると本土爆撃が連日連夜行われていた。七月二十五日も朝五時ぐらいから空襲警報の連続で防空壕から出てくるヒマもない。そのうち七時半になった。岡崎海岸に出発しなければならない時間である。両親が「今日は朝から空襲警報ばかりで作業できないから休んだら」としきりに私をひきとめる。いつもらしくない両親に言葉も気にかけず「国家のためだ」といいながら飛び出し、集合場所へ急いだ。そこには十人ほどの仲間が集まっていた。そのとき、急に空襲警報のサイレンが鳴り響いた。その瞬間爆音が北の空に聞こえた、見上げると空いっぱい蜘蛛の子を散らしたように米軍機が襲ってくる。航空母艦が近海まで来て発進したのであろう。海面すれすれの低空飛行でやってきて、鳴門上空で舞い上がった。急に大きな爆音がする。一瞬数えただけで四十三機いるグラマン戦闘機である。「これはたいへんだ全員避難」の声とともに諏訪神社の森に駆け込んだ。同時に四十三機のグラマンが各々十機ぐらいの編隊に分かれていっせいに私たちの逃げている頭上から松茂航空隊に向かって機銃掃射をはじめた。一方、松茂航空隊から高射砲と機関銃で応戦した。周囲は火と轟音「ザザザザ・・・」雨の如く飛び散る銃火、走る火玉。十機が四編隊で風車の如く、今撃った編隊が過ぎ去ると、次編隊が頭上に襲いかかってくる。銃火の休まる間がない。銃弾の走る火線と爆音でまさに地獄である。その銃弾の下を防空頭巾をかぶりスコップを片手に、教えられてとおり走っては伏せ、伏せては走って安全な森へ急いだ。

二、三回伏せたとき、立ち上がった瞬間もんどり打ってたおれた。次の瞬間立ち上がることもできない。鼻の下、上唇より真っ赤な血飛び散り胸に流れて立てないのだった。

「やられた」と思い、ただ々々一生懸命に這うのみだった。聞こえるのは高射砲と機関銃の炸裂音と手もとどかんばかりの超低空で過ぎ去るグラマンの轟音、その風圧で松や雑木のザーと嵐のようの揺れ動く音だった。その地獄のなかを這い続けて逃げた。一緒だった友人は一人もいない。雑木林を抜けて、神社の物置にはいこんだ。始めて自分の姿を省みた。服の上は胸から肩にかけて一面に血が流れ、服はボロボロに破れている。が、不思議に痛さは感じない。ただ、体中が非常に熱く、ふわふわとした感じで眠気がする。「これはたいへんなことになった」と一人ごとをいった。歩けなくなった右足を見ると、膝の内側のゲートルが切れ、ズボンの破れから血が泡と一緒にぶくぶくと噴き出している。「出血を止めなければ」と身体の自由がきかなくなる自分を励ました。右足のゲートルをはずしてズボンの上からひさし口をしばりつけた。が、どうしても力が

3月21日（水）弘法大師正御影供
10：00～　土砂加持法会

ご先祖様のお彼岸のご供養に是非お参りください。

はいらない。防空頭巾と服を脱ぐと真っ白な下着が右肩から胸にかけ血に染まっている。肩は下着がさけ肉片がバラバラとぶら下がっている。「ア」と声を上げた。右足を縛り終わる。ふらふらしながら左足のゲートル取り外し右肩からぶら下がった肉片と下着と一緒に傷を縛ろうとした。だが、左手と口ではどうしてもうまく縛れない。唇より流れ出る血を払いのけながら傷を押さえた。このとき「死」を覚悟した。と同時に朝の出かけに両親がひきとめた言葉が頭に浮かんで涙がながれた。

この頃、もう飛行機の爆音も機関銃の音もやんでシーンと静かになっていた。「オーイ、誰か来てくれ」と精一杯の声をふりしぼって叫んだ。二、三分して友人が見つけてくれた。

だが、私の姿に友人は呆然として立ちすくんでしまった。「すまんがこれで縛ってくれ」とたのんだ。彼は我に返ったものの震えているようである。右肩を縛ってもらい私はホッとした。友人に「家に伝えてくれ」とたのんだ。友人は真っ青な顔をして飛び出していった。

友人が両親に伝えたところ「まだ息をしていたか」と静かに聞いたという。その日の夕方撫養町の外科病院に運ばれたようだった。私は病院で意識を取り戻した。それは手当の痛さのためだった。手術台に縛られ麻酔薬もないまま右肩の垂れ下がった肉片を鋏でパチパチと切り落としていたのだった。深くえぐられた傷口の奥には骨が見える。医者が「銃弾が入っている」と引っ張っているが出てこない。「これは骨のようだ」といっている。

防空頭巾には親指の太さぐらいの穴があいている。それから考えて機関砲弾が直撃して肩をえぐられたとのことである。右足はひざの内側に親指位の穴があき、足首の方向に銃弾が行っているもよう。針金状のもので探りを入れ、引き出して物差しで測りったら、七寸の深さにいっているという。右肩、右足は火で焼くような激痛が走り、痛さから「死んだ方がましだ」と思った。痛さをこらえるためひだりての人差し指をかんでいた。が、かみ切ってしまうと手をもぎとられた。それを最後に気を失ってしまった。

どれくらい時間が経過したのだろうか。私は川を渡り美しい芝の生えたのはらを小高い丘へ向かって歩いている。十人余りの人が静かに静かに歩いている。所々に小さい美しい花が咲いている。丘の上には花園があるように見える。これは不思議だ、今歩いている道は死後の世界への道ではないか。今までに聞いたことがある。これは道が違うと思った。そっと道をかえて道をかえて川沿いの薄暗い森の方へ走った。どれ程走っただろうか。前方に明るく黄金色に輝く光を見た。そこには観音様がお立ちになって微笑まれていた。私は手を合わせ一心にお願いをした。観音様が「どうぞ」と指し示してくださった。その方向には橋が見えていた。私は何度もお礼をいって、橋を渡り霧のかかるなかへ飛び込んでいった。

全身の痛さに唸った。大きな爆音が聞こえる。両親が大きな声で「気がついたか。今は空襲警報でB二九が西の方へ飛んでいった。みんな防空壕に非難している。気がついてよかった」といった。私は部屋に寝かされていた。それから苦痛の毎日が長いこと続いた。両親は医者から「大きな傷が化膿すると命取りになる。場合によっては手か足を切断しなければならない」といわれていたという。

傷がだいぶ良くなっても、右足は四十五度に曲がったまま。松葉杖をついての歩行訓練が長く続いた。医者は「右足はしびれている。伸びればどうにか歩けるようになるのではないか」という。現代のようにリハビリもない時代。私一人で一ﾐﾘでもよく伸びるようにいし、一方、涙を流しながら痛さをこらえ必死に努力した。長い期間を要したが右足の筋が伸びて真っ直ぐになり松葉杖なしに歩けるようになった。その第一歩を踏み出したときのことは今も忘れることができない。村の人たちはみんな「あなたは奇跡的に良くなるね」と驚きながら祝福してくれた。観音様ありがとうございました。

六、その後にも

学校卒業後、帰郷して社会人となり金融関係の仕事についた。四十年余りの間、充実した仕事をさせていただいた。

両親から「観音様への恩返しは世のため人のため尽くすことだ」と教えられたことは片時も忘れたことがなかった。しかし、長い人生のなかには厳しい苦しいことにもよくであった。難関に突き当たり万策つきたときには中津峰の観音様にお詣りし、お願いしてお知恵を授かり解決したことは数え切れない。いや幾たびも不思議なことにであった。リタイアしてから、中央公民館の生涯学習講座の多くの皆さんの御世話役に熱中し。また、国際貢献の積極的にしていた。本文（先月号）冒頭に記した平成九年四月十六日、四回目の生命を頂いたのはこのときの出来事であった。

その後、元気だったが、平成十一年五月悪性の大腸ガンが見つかり切開手術を受けました。大手術で体力が低下し、十二年四月にはまた心臓病が再発しました。元気であった時点ではさらにこのような病気をしようとは知る由もなかった。それがさらに観音様の御慈悲を受けて再起することができました。

七、むすび

観音様から生命を頂く、その都度、私に物事の見方、考え方を改めさせてくださいました。二十五歳から弓道をはじめ、禅の道を求めて修養一途に励み。また、国民体育大会の県代表や監督で何度も出場することができ、自信をつける機会を与えていただきました。人生の苦境に何度もありましたが、それを乗り越えさせていただきました。それで「いつも人のためになる」ことを目的に努力しなければと努めてまいりました。人の生命の尊さは自分の力ではどうにもならないということです「人はみんな生かされているのだ」と生死の間を何度もさまよって身を以て教えていただきました。

最近の世情はＩＴ革命のパワーに魅せられ収益性と進展生を望み、便利さの追求に突っ走りＩＴに潜む裏側を見落とし、人間の目標を失いかけているのではないでしょうか。

二十一世紀は世界の人々が観音様の御教えを心として平和の祈りで世界が結ばれなければと考えます。そして、私は観音様からいただいた生命を大切にし、自分を大切にして、「人のため、地域の人々のため、また世界の人々のため」お役に立つよう頑張っていくこと。これが恩返しと思い決意を新たにしています。

いまはおかげさまで元気に中津峰の観音様にお詣りできることを歓びとして一日一生の思いで頑張って生きさせていただいております。観音様ありがとうございます。合掌

えひめ丸、お見舞い。

航海実習は一航海で見違えるようにたくましくなるという。その矢先の思わぬ事故だった。まだ帰らぬ九人の身内の方、宇和島水産高校の関係者の方々に衷心よりお見舞い申し上げます。

原子力潜水艦は北極海の氷を破壊できるよう作られている。それが水深一二〇ﾒｰﾄﾙから緊急浮上するとどれぐらいの力になるのか私は計算できないが、映像で見るかぎりあの重い潜水艦がイルカのようにジャンプするほどの力だ。その背中をぶっつけられては比較的新しい実習船えひめ丸もどうしようもない。

当初、これに対し、米海軍は情報を隠した。帝国海軍に相通じるものを感じたのは私だけだろうか。その後は日米関係がこじれるのを良しとしないブッシュ大統領のもと海軍大将が謝罪に来るに至った。しかし、九人のご家族にとっては癒されることはあるまい。

堀田校長以下教職員もたいへんだったと想像する。校長はすくハワイへ教頭は留守部隊を編成した。ハワイへ向かうといっても私などこへいってどう対応したらよいのか想像もつかない。留守部隊は地味だがもっとたいへんであっただろう。誹謗中傷。マスコミへの対応。その中にあって帰還の準備、まさに寝食を削ってのことであったに違いない。

三月四日の徳島新聞にはえひめ丸の「引き上げ技術的に可能」としている。だが水深六百ﾒｰﾄﾙの大陸底から船を引き上げた前例はない。簡単に六百メートルというがこの長さのワイヤーが必要だ。水圧は六百気圧、もちろん人間は作業できない。

同紙には米運輸安全委員会が発表した航跡に関する分析結果が出ている。急激な方向転換を繰り返したあと緊急浮上をしている。専門家は「意味不明」としているが、我々素人が考えると明快だ。民間人が潜水艦にのせてもらっても窓から外が見えるわけではない、計器ばかり説明されても面白くない。体験航海らしくするにはこうしたデモしかなかろう。五日からはじまる査問会議、そして多分開かれるであろう軍法会議でことの真相が分かってくるだろう。みんなが納得のいく解決を期待する。